

「発達」の概念、発達研究とその発表の組織化

小 嶋 秀 夫
(名古屋大学)

「発達」の概念

シンポジウム「発達研究と現代社会」は、大教室に入り切れないほどの多くの参加者を集めた。この事実は、発達という概念自体が近代社会の要求に合致するような人間観に基づいたものであり、本質的に個人を抑圧する性質をもつという山下(1977)の「反発達論」の主張の中に、多くの教育心理学者、発達研究者の関心をひくものが含まれていることの現われと解釈できる。このシンポジウムへの参加者の多くが、山下の主張に耳を傾けそれを理解しようとする構えをもっていたと思われる。それと同時に、かれらは、いくつかの異なった立場の発達研究者達——波多野・天野・村井と、山下・篠原との間に、平行線的ではない議論の切り結びを期待していたことであろう。

しかし、少なくとも筆者に関する限り、その期待は裏切られた。それぞれの立場から、現在自分が行っている発達研究の有意義性を主張する発達研究者は、反発達論者の主張の一部は認めながらも、それによって各自の研究活動や考え方にインパクトを受けたようには見えない。また、反発達論者は、発達研究者が指摘するような発達研究の社会的意義を、容易に正当なものとしては受け容れない。両者が共通のグラウンドに立って議論し、相互に不動のままで終わったのなら、それもよいだろう。しかし筆者には、両者の議論の多くはグラウンド外でのそれに終始してしまったように思える。

そうなった最大の原因の1つは、現在使われている発達という概念の形式的側面も内容的側面も、ともに本格的に論じられなかったことである。シンポジウムにおいて、発達研究者は、程度の差はあるが発達の基準を自明のものとして扱い深く論じなかった。その立場では、子どもが認知的有能性を増したり、言葉の話せない子どもが少しでも話せるようになることは疑いもなく発達であるとされた。それに対して反発達論者は、抽象的な「発達」という言葉を振りまわしてそれへの同調を求めることが、個人を抑圧するものであると主張し、発達によって「人間になる」のではなく生れながらにして「人間である」という捉え方を強調する。そこでは生産性向上と結び付く特性と意味づけられた発達が論じられ、その内容の詳しい吟味が不足している。

発達研究者は、個体の行動や状態、機能と構造の変化を「発達の」変化と捉えるか捉えないかの基準を有しているはずである。しかし、今回の提案者と討論者にな

った発達研究者は、広い意味での認知領域の研究を中心とする人々であったせいも、その問題は深く論じられなかった。また、反発達論者も、人間の変化を捉える何らかの基準をもっているはずである。なぜなら、反発達論者が、「例えば、歩ける・歩けないと言えよいいので、別に発達ということばを使わなくてもよい」という意味の主張をするとき、子どもの行動や状態の変化すべてを一樣に問題にしているのであろうか。恐らくそうではないだろう。たとえ、個体の行動・状態の記述は具体の水準で行っても、その背後に必ず、より抽象的な概念としての基準が存在する。シンポジウムでは、それが明示されなかった。その「発達とは呼ばない」基準と、発達研究者の「発達」の基準との関係を論じることが、両者間の議論を深めることにつながるのではないか。

筆者は、「発達」またはそれに代る概念の問題は、すべての発達研究(と仮に呼んでおく)の基本にあるものだと思う。筆者の考えは園原(心理学事典, 1957)のそれに似ている。すなわち、「発達とは、より高度で完全な状態、あるいは環境によりよく適応した状態という方向性をもった視点から、個体の生涯またはその部分にわたる行動と状態、あるいは構造と機能の系列的・組織的变化を記述し構成する際に適用される概念である」というのが、筆者の暫定的定義である。発達のコースの研究でも発達過程の研究でも(小嶋, 1979)、発達の次元が何であるかが問われる。その設定に当たっては、理論的に想定された発達過程と関係する個体の属性が選ばれる。そこに、事象を捉え意味づける発達の視点が働いている。それは、「よさ」という価値を含んだ方向性のある視点であろう。ただし、絶対的な価値を措定することはできないから、1つの事象に対して複数個の発達の見方が存立しうる。反発達論においても、何らかの意味での「よさ」の基準はあると考えられる。それは、発達研究者の価値の諸基準と全然関係ないものであろうか。

さしあたり、われわれは何をすべきであろうか。それは、各々の発達研究者が、自分の使用している発達の指標や設定した発達の次元がどのような意味で「発達の」なのかを明確にすることである。これは、今回の総会の発達部門に発表された341の論文にかかわるすべての研究者への問いである。この問題が余りにも自明のことと扱われて深く追究されないままであるというのが筆者の偽わらざる印象である。この検討は当然、社会との関係における発達研究者の責任と役割の問題や発達研究の倫

理の問題(小嶋, 1975, 1979)につながっていく。

発達研究とその発表の組織化

日本教育心理学会総会の発表論文は、日本の他の心理学会大会のそれと同じように、現在のところ無審査で発表される。そして、今回の総会における発達部門の27のセッションは、他の場合と同じように、単に集った論文を大雑把にクラスタリングしたものには過ぎない。しかも、1つのセッションに10もの内容的に多様な論文が発表されることもあり、3~4時間にもわたる発表とそれに関する討論とは、発表者にも聴衆にも大きな忍耐を要求する。より大きな問題は、セッションへの分類がその年に集った論文に依存しているため、分類カテゴリーが不安定になることである。そのために、発達研究の重要なテーマを、何年間か継続的・発展的に扱うことが困難となる。この問題を解決するための組織化は考えられないだろうか。

それを考える際の重要な前提は、研究者のイニシアティブに優先権を与えることである。研究とその発表の効率のよい組織化を計るために、研究者のイニシアティブに不当な制限を加えるようなことがあってはならない。筆者がSRCD (Society for Research in Child Development)などを参考に思いつくことは、次のようである。

まず、総会開催校とは別に、学会としての総会プログラム委員会を構成する。これは任期を2~3年位とし、毎年一部分ずつ交替することとする。委員会は会員の意見を徴して重要な研究テーマを定め、それに関する総会発表論文を募集する。論文が集まれば委員会はその内容をチェックし、1セッションとして適当な論文を選ぶ。そこで適切とされなかった論文は、従来通りの個人発表の方に回ってもらう。

プログラム委員会は、会員たちの提起によるシンポジウム(現在の自主シンポジウム)をも奨励するように努める。テーマは上述の重要テーマのほかに自由なものも認めるようにする。後者の場合は当分審査をせず、時間と場所の許す限り、できるだけ開けるようにする。魅力ある内容かどうかは、聴衆が判断するであろう。

このような方式をとれば、どのようなテーマのシンポジウムが開かれることになるだろうか。その予想は困難

であるが、次のような結果になるかも知れない。1つは、かなり狭い領域の専門的研究からなるシンポジウムが現れる可能性がある。ある限られた領域に組織的に研究を集中させることは、まだ研究者の層の薄いわが国で問題解決をはかる1つの方法である。それと同時に重要なことは、その領域の研究者が自分たちの研究が、人間の発達と教育に対してどのような関連性をもつかを認識し、それを研究者と実践家とにコミュニケートすることである。会員たちの提起によるシンポジウムは、その性質上、狭い範囲の研究者だけによる閉鎖性を破らざるを得ないだろう。今年度の自主シンポジウム「Learning disabilitiesをめぐるとの問題について」は、このタイプと、次に述べるタイプのシンポジウムの1つの方向を示しているのではなからうか。

もう1つ現われる可能性のあるシンポジウムの型は、学際的なものである。ただし、抽象性の高い問題について、異なった学問領域の専門家が論じても、かみ合った本当の議論になることは少ない。この解決法の1つは、具体的な事例や事象を対象に選び、異なった領域からの専門家が役割分担をしつつ協力して、事象の解明や具体的問題の解決にあたることである。現実の社会の中において発達していく個体がなげかける研究問題の解決に、研究者がそれぞれ専門性をいかに発揮しうるかを問うことが、上に述べた社会との関係における発達研究者の責任と役割の問題に答えていく1つの道である。

このように考えると、発達研究者に対する「大きな問い」に答えうるように、研究と学会におけるその発表を組織化する道を探ることが緊急の課題である。それにより、われわれの研究が活力を増し、学会が有意義なコミュニケーションの場となることが期待できよう。

文 献

- 小嶋秀夫 1975 概観 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 14巻 金子書房 pp.1-21
 小嶋秀夫 1979 概観 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 18巻 金子書房 pp.1-23
 山下恒男 1977 反発達論—抑圧の人間学からの解放— 現代書館

(1979年10月15日)

「発達」部門の論評

鑪 幹 八 郎
(広島大学)

「発達」の領域で発表された研究の数が学会全体で発表された他領域の研究の数を少し上回っていたのは印象的であった。教育心理学会で「発達」への関心の高さが

窺われて興味深い。また全体的な印象として筆者の得たものは、母子関係の研究、乳幼児の研究が発達早期になっていることである。これも研究の1つの傾向である